

第1章

「技術英語」の概要

本章では技術英語の概要と題して、具体的なテクニックやノウハウの話をする前に、そもそも「技術英語とは何ぞや??」ということについて言及したいと思います。概して、日本人は「Know-How（方法は何か?）」を考えるのは得意なのですが、「Know-What（対象は何か?）」や「Know-Why（理由は何か?）」が頭から抜け落ちがちです。

しかし、技術英語を含む英語の学習にあたっては「自分が勉強すべきことは何なのか?」という自明とも思えることをしっかりと考える必要があります。筆者も含む多忙な現代人は英語の勉強に費やせる時間も自ずと限られてきます。よって、限られた時間内で英語力を確実に向上するには、学習の効率性をよく考える必要があります。「効率が良い学習の仕方」というのは、すなわち、「自分が業務で必要とする英語の対象範囲（Know-What）を見極めて優先順位を付けて、優先度が高い順から学んでいく」ということです。初心者が陥りがちな畏は「何も考えずに闇雲に“全方位的”に勉強しようとする」ことです。

実は、個々人が置かれている状況に応じて、仕事で必要とされる英語の種類は千差万別です。ということは、自分の仕事に直接的に関係ない（縁遠い）種類の英語を学んだとしても遠回りとなる（あるいは役に立たない）恐れがあります。本章では、英語の種類“千差万別”ぶりの一例を示します。

そして、本書の最初となる本章では、技術英語の核心とも言える大事な

心構えである「技術コミュニケーションの3C」を紹介します。本書では色々と具体的なテクニックやノウハウを解説しますが、この「3C」は全ての根底に通じている普遍的な鉄則です。

1 「英語」の種類

一口に「英語」と言っても、色々な種類（使われ方）があります。英語の分類の一例を示します。

KEYWORD

「英語」の種類（一例）

- ① 入試用英語
(English for entrance examinations)
- ② 英文学 (English literature)
- ③ 日常会話の英語 (Daily conversation)
- ④ ハリウッド映画の英語 (Slang)
- ⑤ グロービッシュ (Globish)
- ⑥ 技術英語 (Technical English)

筆者がざっと思いつくだけでも、これだけの種類を列挙できました。これらは全て「英語」であることには間違いありませんが、性質や使われ方が大きく異なります。各々の差異に留意しないと、外国人との国際コミュニケーションで問題を引き起こす恐れもあります。

① 入試用英語 (English for entrance examinations)

恐らく、日本人にとって一番馴染みのある「英語」でしょう。そして、

「英語」嫌いを量産する諸悪の元凶扱いもされます。しかし、筆者の見解としては、受験英語こそが「英語」の基礎体力であると考えています。実際に、ビジネスの現場で使う英語であっても、義務教育（中学校卒業、実用英検3級）レベルで何とかなる事が多いです。そういう事情もあり、本書の第3章では、この「受験英語」に焦点をあてて、英文法の解説を行います。

② 英文学 (English literature)

英文学の名手は数多いですが、本節では William Shakespeare を例に挙げます。さて、下の英文はどう和訳すべきでしょうか？

POINT Hamlet の名台詞 (William Shakespeare)

To be or not to be, that is the question.



難しい英単語は一切ありません。中学生レベルでしょう。しかし、この英文を「正確（自然）に和訳しろ」と言われると非常に難しいと感じるのではないのでしょうか。実際、筆者の技術英語セミナーでは、受講生にこの質問をするのですが、マトモに回答できる人はほぼ居ません。一応、定訳となっているのは「生きるべきか死ぬべきか、それが問題である」という和文です。この定訳は相当な意識だと感じます。この英文は to 不定詞（名詞的用法）を駆使しており、“文学的な格調高さ”等も加味すると、定訳のような和文に落ち着くという訳です。

本書の読者層と想定されるエンジニアが Hamlet のような英文学的な英語を扱う必然性は低いと言えるでしょう。実際の技術文書では、このような技巧的な英文を見かけることは少ないです。Hamlet のような英文学を勉強することは、長い目で見れば、英語力の向上につながると思います。

しかし、英語力アップの即効性を求められるような方（例：海外勤務が急に決まった等）にはお勧めできません。

筆者が英語の勉強法をヒアリングした中には、あの Harry Potter シリーズを原著の英文で読むことで英語を勉強しようとしている方が散見されました。Harry Potter シリーズは本格的なストーリーのファンタジー小説ということもあり、古典的な英文学に近いものがあります。誤解を恐れずに言うと、日本で言えば「源氏物語」や「古事記」のような古文です。確かに、古文を勉強することも、広い意味では日本語の学習につながると思います。例えば、日本語の初学者である外国人の方々に対して「いきなり古文を読め」とは言い難いものがあります。

③ 日常会話の英語 (Daily conversation)

「日常」の会話と言いながらも、日常会話の英語は意外と難しいです。その理由は、英語が事実上の国際標準語であることもあり、英語話者は千差万別であるからです。出生地、国籍、母国語、知的水準、得意分野、文化、宗教等のバックグラウンドが異なる可能性があり、そういったバックグラウンドの差異がそのまま使う英語にも表れてきます。とりわけ、発音が母国語に大きく依存します。

ビジネスの場で用いるような公式な英語の言い回しや発音などは、ある程度“標準化”されていると言えます。国際会議の場などは参加者の属性が多岐にわたりますし、公式な場特有のプロトコル（礼儀作法）があるから、英語も“標準化”せざるを得ないのです。しかし、日常会話の英語はカジュアルであり、内輪で会話する分にはそのような縛りが少ないため、各人のバックグラウンド丸出しの英語となる訳です。

④ ハリウッド映画の英語 (Slang)

英語の勉強法をヒアリングすると、Harry Potter と並んで頻出するのが Hollywood 映画を観て英語を勉強している方です。勿論、Hollywood 映画を鑑賞して英語を学ぶのも悪くはないのですが、その際に気をつけなければならないのが「Slang (スラング)」です。

Slang と言うのは、いわゆる「俗語」のことです。下品あるいは差別的な表現の場合が多いので要注意です。映画に出演している俳優の言い回しをソックリそのまま真似しようとすると、一般的なネイティブに対してはとんでもなく酷い台詞を口から吐いてしまう恐れがあります。特に、男性が好むようなアクション映画は“荒々しい”台詞が多いため、ビジネスのようなフォーマルな場には適さない表現が乱発しますので要注意です。

Slang の一例を下に示します。

POINT

Slang の一例

● くだけた短縮形

“want to” → “wanna” あるいは “going to” → “gonna” のような短縮形が頻出する。これらの短縮形は表現としてはカジュアル過ぎるので、フォーマルなビジネスの場では “wanna” や “gonna” を使うのは避けよう。

